
草食男子も肉を食う

はぐれ会長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

草食男子も肉を食う

【Nコード】

N6539Y

【作者名】

はぐれ会長

【あらすじ】

ゆるふわりんな草食系男子高校生——『須藤 圭太（すどう 圭太）』が、ひょんなことから、入学早々個性的な美少女集まる生徒会に入れられてしまい、その中で翻弄されながらも、ゆるゆるえいえい頑張るラブコメディ。一話あたりがとっても短いので、プチプチくん潰し的に、暇つぶしとして利用していただければ幸いです。

序 はじめに *登場人物紹介とか（前書き）

えー、これはあくまで作者が推奨するだけであり、作品を楽しむにあたって読む必要は全くございません。

早く本編に行きたい方は飛ばしてくださいナ。

ただ、予備知識として読んでおくと、お話が楽しくなるかもです。

序 はじめに * 登場人物紹介とか

ただの小説のくせに楽しみ方とつけてしまつてごめんなさい。
少しだけお話させてくださいナ。

えーと、この小説はプチプチくん潰し小説です。（自称）
見たいテレビ番組が始まるまでの数分に、チャットしながら相手の
返信待ちのとき。などなど、数えあげればキリがありませんが、
おヒマな時に、スススと一話二話と読んでいただければ幸いです。
一つ一つの話は短く、五分とかからず読み終わられるようになって
いる（ハズです）ので。

では、折角なので、より面白くなるよう簡単な登場人物紹介をば。

通称『正義の生徒会』――。

そこは、風紀の高上こそ達人レベルなものの、通常業務である生徒
会の事務仕事を全然やらないことで有名な個性派揃いの生徒会。
からかわれながらも、チマチマしたことを延々やってられる圭太は
事務仕事でバリバリ活躍して、それなりに信頼されているとか（面
倒ごとの駆除に喜ばれてるだけとも？）。

平和を愛する草食系男子——『須藤^{すどう}圭太^{けいた}』高校一年

趣味：まったりすること、日向ぼっことか。

特技：チマチマしたことを続けられるよ！ 料理とか裁縫とかも上手。

苦手なもの：さわがしいこと

家族：父、母、妹

好みは全体的にじじくさい感じで。あ、でもゲームとか音楽とかもそれなりには嗜んでるよ！

人生、平凡に歩んでまいりました。何も事件などありません。ゆるくり。

妹のおかげで、異性と接することに慣れているのが、かろうじてラブロメをやっつけていける理由。

「みなさん、平和が一番ですよー」

悪を許さぬ正義の生徒会長——『三千剣^{さんぜんつるぎ}市^{いち}』高校二年

趣味：ヒーローものの作品、

特技：闘いは強いぞ！

嫌いなもの：裏切り、ずるいやつ、勉強

家族：父、母、兄、姉

基本はただの元気なお姉さんだが、悪をみつけるとスイッチが入り、我を忘れて突撃する。『我が正義の刃で、悪を貫く！！』何か芝居がかってるし。

ゲームとかデジタルなものは苦手、でも圭太に悪を討伐するゲームを借りて、以来はまる。

生徒会長のくせにあんまり頭が良くない。生徒会役員は常に平均を上回らなければいけない規則があるので、いつも四苦八苦。

「皆の者安心せよ！ この三千剣市が来たからにはこれ以上悪者共に好き勝手はさせぬ、我が正義の刃で、悪を貫く！！」

生徒会の腹黒作戦参報——『黒咲くろさき 彩子あやこ』 高校二年

趣味：人をからかうこと

特技：一瞬で策謀を練り上げる。＊ただし邪悪なものに限る

苦手なもの：体を動かすこと＊果てしなく弱い

家族：母、妹

クーデターを画策しそうな感じの生徒会の頭脳。市とは昔からの幼馴染で親友関係にある。

行動の裏にすべて策がある。おもしろそうだから、なんて理由で誰に対しても恐れず色々悪事をはたらく。

でも、相手が本当に嫌がるようなことはしないよう気を使ってる。

もし、ホントに悲しい思いをさせちゃったら殊勝に謝る。＊でもやめない。そして嫌いな奴には容赦ゼロ

貧弱、脆弱、病弱。特に病気持ちではないと言いが、よく吐血する。心配。

「私の脳より練り上げられる策に限りなどない。くく、愚昧な己に後悔するがいい」

見た目は不良、中身は善い人？ぶつきらぼつな市の被害者——『唯^{ゆい}島^{しま}祭^{まつり}』 高校一年

趣味：これといって特にナシ。音楽聴いたり、漫画読んだりゲームしたり。でも、女の子っぽいショッピングとかは二ガテ

特技：体を使うこと

苦手なもの：人付き合い

家族：父、母

金髪の一年生。ぶつちやけ圭太より漢らしい。

風紀を乱す側に一見みえるが、極度の照れ屋故に、人付き合いが二ガテで、あんまり人が近寄って来ないようにこんな立ち居振る舞いでも、ゴミ箱に入り損ねて落ちていたゴミを拾って入れたりなど、さり気ない気遣いにより、みんな言わないがバレていてクラス内での人気は上々。

ある雨の日に、捨て猫に傘をやって去ろうとしているところを市に発見されてしまい、感動され、そのまま無理やり生徒会入りが決定。動物に好かれる、祭も動物が大好き。

「だから、オレがそんなのやるわけねーだろ……」

謎多き大和撫子にして生徒会顧問——『出浦^{いでうら} ねね』

趣味：旦那さんに尽くすこと

特技：不明

苦手なもの：不明

家族：夫がいる以外謎

個性派集まる仕事しない生徒会の顧問に抜擢されてしまったツイてない教師、担当は古典。

しかし本人も生徒会メンバーに勝るとも劣らぬ変わり者で、常に着物出勤。

ヒマさえあれば自分の旦那さんの話ばかりをしているが、旦那さんの職業など詳しいことは何も教えてくれない。

仕事しない生徒会に変わって仕事を片付けてあげることもあるので、優しい先生ではあるのだが……。

「聞いて聞いて！ あの人がね……！？」

人物はその内増えるかもですが、その都度アトガキに書くので、こ

心配なくです。

序 はじめに *登場人物紹介とか（後書き）

それではお待たせいたしました。

草食男子の、賑やかゆるゆる、恋愛日常物語をどうぞ応援してやってくださいナ。

一 最大の危機

ぼくは平和がすきだ。

ドタバタした起伏のある日々は創作物の中だけで十分。
何でもない毎日が続くのが、一番幸せだとぼくは思う。

常日頃からそんなことだけを考えて過ごしたきたぼく——須藤
圭太^{けいた}に、生涯最大の危機が訪れていた。

なるたけ安全で平穩を……と、信号で青が点滅してたらもう横断
歩道には踏み出さないぼく。

勿論今年から始まる高校生活の進学先だって、風紀が良くてのび
のびとした校風のところを選んだ。

……だけど。

「校外で他校の不良さんに絡まれちゃ世話ないよねえ……。」

そう、ぼくは今他校の不良さんに絡まれていた。

今日は入学式なので、気の抜けた奴が多い——という感じで待つ
ていたのだろうか。

ぼくみたいな、いかにも草食さんな人が通るのを……。

「コラてめえ、何一人でぶつぶつ言ってやがる！」
ひいっ！

不良さんの恫喝にぼくは思わず身をすくめる。

あわわ、人生で初めての絡まれ体験。予想以上に怖いよ。

向こうはぼくより身長が高くって、一対一でもとても敵いそうに
ない。しかも三人に囲まれてる。

走って逃げてもダメだろうなあ……。

声をあげても路地裏に引っ張り込まれたこの状況じゃ……。

要求通り財布を渡すしかないのかな？

やだなあ……今月入学祝いとかで親戚さんからお金とか貰ったば

かりでいつもより暖かいのに。

……ええい仕方ない！ ぼくも男だ、覚悟を決めよう！

相手も人間、ちゃんと言ったらわかってくれるはず！

「あ、あのーです、ねー」

威勢よく言ったつもりが、よろよろとした小動物のような声。それに対して、

「ああ！？」

「ひいっ！」

不良さんは声が大きい、迫力もバツチリだ。

うう、やっぱりダメだ……勝てっこない……。

ぼくの中に住んでいる弱気なぼくと、強気じゃないぼくが、二人とも諦めようと言っている。

全面降伏かあ……。

断腸の思いでカバンから財布を取り出そうとした、その時だった

――！

「待てい！ お前たちい！」

さっきの不良さんの声とも負けるとも劣らぬ大きさの声で、凛とした一喝がぼくと不良さんの間に響いた。

良い声だなあ……なんて、ちょっと場違いなことを思った。

声の主は女の子で、ぼくと不良さんたちに向かってずんずんと近づいてくる。

服装は……驚いたことに、ぼくと同じ学校の制服だった。

それ以上に驚いたのは、その人が竹箒を構えて不良たちと対峙したことだった。

「おいおい、譲ちゃん一人で俺らを倒すつもりかよ。しかもそんなもんで」

不良さんたちの言うとおりだと思う。

でも今は、不良さんたちの注意が女の子に向いている内に逃げた方がいんだろうか。

……いや、助けに来てくれた女の子を見捨てて逃げるなんて、男の子じゃない。

ぼくと女の子一人。勝てる見込みは全然ないけど、やるしかないんだろう。

う、後ろから不意打ちならちよつとぐらい隙は作れるはず。その間に女の子と一緒に逃げれば――。

ぼくが今度こそ覚悟を決めて、不良さんたちの背中に向けて一歩足を踏み込むと、

「安心するがいい少年よ、この三千剣^{さんぜんつるぎ} 市^{いち}が来たからにはこれ以上悪者共に好き勝手はさせぬ、我が正義の刃で、悪を貫く!!」

天高く自らの得物を突き上げ、格好良くポーズを決めながら、ぼくに制止を促す女の子。

……構えているのが竹箒じゃなかったら格好良かつただろうになあ。

不良さんたちは、女の子のアクションを見て苦笑している。そりゃー、そうかなとぼくは思う。

今時名乗りをあげて悪を討つ、なんて。ヒーローじゃないんだから。

でもぼくのその認識は、すぐに改められることになった。

彼女は――本当にヒーローみたいに強かったのだ。

何が起こっているのかわからないくらい強い。というか、すごい女の子は跳躍し、突き（竹箒で）、払い（竹箒で）、ばったばったと不良さんたちをなぎ倒していく。

その様はまるで剣舞でも舞っているようで、竹箒で戦っているのに、ぼくは思わず見惚れてしまった。

「大丈夫か、少年」

そう言葉をかけられ、ぼくはようやくハッとして下を見下ろす。
不良さんたちがのびていた。意識こそ失ってないけど、しばらく
動けなさそう。

うわぁ……。

ぼくは胸の内から熱いものがこみ上げてくるのを感じていた。

「ん？ どうした、しょうね——わわっ！」

「ありがとうございますありがとうございます……！」

ぼくは思わず女の子に飛びついていった。

ぼくよりも少しだけ背丈が高い、上級生だろうか。

なんにせよ、この人はぼくを助けてくれたのだ。怖い不良さんたちから！

「い、いや、当然のことをしたまでで礼には……って、な、何故泣いている……？」

そう言われて、はじめて自分の視界がうつすらと潤んでいることに気づく。

「こ、怖かったですし、嬉しかったですから……」

自分でも理由がいまいちわからなかったので、説明もなんかあやふや。

でも怖かったのも、助けてくれてすごく嬉しかったのも本当だ。

「うつつ、よ、世の中には良い人もいるんですね……」

「あ、あの……感謝してくれるのは嬉しいのだが、そ、そろそろはなしてくれないか？」

女の子が身をよじりながら、少し頬を赤くして言う。

「んん？ どうしてだろう？」

ぼくは自分の状況を冷静に整理してみた。

ぼくは今ちよつと屈み気味に女の子に抱きついていて。で、女の子はぼくよりも背丈が高い。

必然的にぼくの頭は……？ どこに埋められる……？

むにむに。やわらかい。

「わ、わわわわわ！ うわぁっ！ ごめんなさい……！」

ぼくは脊髓反射で飛びのく。

助けてくれた女の子になんてことを……！

「ご、ごめんなさい！ わざとじゃないんです！ お詫びしますから」

「いや、い、いい。別に、その……わざとではないということは何となくわかるから」

焦っているぼくも真っ赤だろうが、女の子も少し恥ずかしそうにしている。

「とにかく、君が無事なら良かった。私はこ、これで……」

背を向ける女の子、なびいたポニーテールが、遅れて彼女の背中に、さらに遅れて、ぼくは彼女を呼び止めた。

どうして——？ 助けてくれてなにかお返しがしたかったのは本当。でも、相手もいいと言っているんだから、ことなかれ主義のぼくとしては、このまま頭を下げて見送るのが普通なんじゃないだろうか。

でもどうしてか、気づいた時には口を動かしていた。

「待って下さい！ 助けていただいたこともありますし、その、何かお返し出来ませんか？」

彼女は振り返る、少し困ったような顔だ。

ああ、やっぱり。ぼくは迷惑をかけてる。

でも自分の言葉を取り下げたくない。目の前にいる綺麗な人と、もう少しだけ関わりを持ちたい。

ぼくにしては本当に珍しく、そんなことを思ってしまった。

「ああ、そうだ」

ぼくのもやもやとした思考は、彼女の透き通るような声でシャットアウトされる。

「見たところ少年——君はうちの学校の生徒だね？」

「あ、はい。そうです。今日入学式がありました……」

とそこで、自分の言ったことから疑問が生まれる。

そうだ、今日は入学式だ。

目の前の人はどう見ても上級生、入学式は基本的に新入生以外休みなのでは……？

そんな多くの疑問は、次の彼女の言葉で払拭されることとなる。

「私に恩返しがしたいと思うなら——君、生徒会に入らないかい？」

生徒会……ああなるほど、彼女は生徒会役員なのか。なら今日登校していてもおかしくは——って、

「え？」

新入初日のぼくが生徒会？

ぼくの平凡安全のんのん暮らしセンサーがウーウーと警告を鳴らしている。

ひょっとしてぼくは…… たった今、非常に面倒くさいことに巻き込まれたんじゃないだろうか……。

一 最大の危機（後書き）

初回なので長いです。

でも、以降はこれの四分の一ぐらいが続くと思います。

もっと小さいかも？

二 正義の生徒会

「あの、ほんとにぼく生徒会入り決定なんですかあ？」
「無論そうだ」

入学式から二日ほどお休みをはさんでの始業式。終礼が終わるや否や、新しい学校みんなと交流をする間もなく、目の前を歩く女の人に腕をつかまれ、現在進行形で誘導され中。

前を歩く女の子は、入学式の時にぼくを不良さんたちから護ってくれた、優しくて強くて、綺麗な人。

そういう意味では接点アリなんだけど、他には何にも知らない。同じ学校の人で、生徒会に入ってるのかな？ っていうぐらい。

あの時は自己紹介もかわさずに颯爽と去っていつちゃったし。だからぼくの名前もわからないはずだ。

それなのに……

「ぼくなんかに務まるんでしょうか、生徒会役員なんて」

「私に恩返しをしたいと言ったのは君の方じゃないか」

歩みは止めず、ずんずんとどこかへ向かいながら返事をする女の子。行き先は聞いていないけど、予想がつかない方が変だと思う。

「そ、それはそうですけど……」

「さあ、ついたぞ！」

女の子は一つの部屋の前で足を止める。

その部屋のプレートには——『生徒会室』

……やっぱり。

「あ、あの、ぼくなんか何の役にも立たないかも知れませんが、ホント。それでもいいんですか？」

自分から恩返しをしたいと言っておきながら、ちょっと情けないと思うが、だってまさか入学早々生徒会に入れられるなんて……。

「ああ、私は人を見る目には自信がある方なんだ。君なら大丈夫……だ……」

鷹揚に頷いていた女の子が、突如視点をある一点に定め、動かなくなる。

「……ど、どうしました？」

「……………」

女の子は黙ったままだ。

ど、どうしたらいいんだろう……。

一体、視線の先に何が？

ぼくも女の子の向いている方向をたどろうとすると――

「――おいそこのお前え！！ 今廊下に何を捨てたあ！」

……女の子が視線の先に向かって突進していった。

そこには新入生と思われる一人の男の子、足元にはパンの包装紙が落ちている。

多分に、ポイ捨てを行っただろうと思うけど……。

「神聖なる校内にゴミを捨てるとはなんたる不届き者！ この三千剣市が見逃すとも思ったか！ 我が正義の刃で、悪を貫く！！」

女の子がわけもわかってない男の子の胸倉を掴みあげてガクガクとやっている。

ぼくは、女の子が説教をして男の子が謝るまでの一部始終を呆然と見つめながら、ぼんやりと思った。

……そのちよつと恥ずかしい口上、決め台詞だったんですね……。

これは後からクラスの子に聞いた話だが、この学校の生徒会は、無駄に無意味に不必要に風紀だけを正すことから、『正義の生徒会』とか言われているらしい。

二 正義の生徒会（後書き）

平均これぐらいの長さでやりたいですね。

プチプチくん潰し小説を自称する身としては。 ええ。

三 正義の生徒会長

「いやあ、恥ずかしいところを見せてしまったな」

「いえ……別に……はい……」

ポリポリと恥ずかしそうに頭をかいている女の子。

うーん……。今を見てますますこの生徒会に入るのが躊躇われてしまったんだけど。

ぼくあんなこと出来ないよ？ 全然強くないし。平和に平穩にしようよ。

「それじゃあ改めて、生徒会室に入ろうか」

でもぼくのそんな心の中の葛藤なんておかまいなしで、女の子は扉を開いて、ぼくをぐいぐいと中へ引つ張る。

うっ、力……強い……。

ぼくの抵抗なんてあつてないようなもので、ほぼノーブレーキで引つ張られてしまう。

結果。

「うわああ」

勢いよく引つ張られてぼくはそのまま体勢を崩し、前のめりに倒れてしまう。

「いててて……」

ひざをばしぱしと払って立ち上がると、そこには——……生徒会室が広がっていた。いや、うん、当たり前なんだけどね。他に何て形容したらいいかわからなくて。

部屋の中央に会議用の長テーブルがあつて、壁の隅には棚がギッシリ。ついでにその棚の中にもファイルがギッシリ。

会議で使うであろう、大きめのホワイトボードが置いてあった。

……何故だかわからないけど、『正々堂々と戦いぬけ！』と、書か

れている。……何の会議？

「ささ、座ってくれ」

ぼくの手を引っ張った女の子は悪びれもせずにぼくを会議用机の椅子に座らせた。

女の子はぼくの対面へ座る。長方形のテーブルの、広い面にお互い座っているので、距離が近い。端的に言うと、ちよっぴり恥ずかしい。

「さあ、まずは自己紹介から始めようか。この前はしっかりと出来なかったからな！」

「はあ……」

相槌をうちながらぼくはチラリと横に目をやる。

女の子の隣に、誰か別の女の子が座っている。

気になる。

気になるけれど、まずは自己紹介した方がいいのかな？

ぼくが自己紹介すれば、目の前の女の子も、その隣の女の子も続いてくれるだろうし……。

そしてはんなりとお断りするキツカケを見つければ……。

「え、えーと……」

全草食系男子にとって、自己紹介とは二ガテなものだと思う。ぼくもそうだ。

それも今回は、クラスでの自己紹介より恥ずかしい。目の前に座る綺麗な女の子が、立ち上がって話し始めるぼくのことを興味深々で見上げている。

「須藤 すどう 圭太 けいたです。一年C組です。よろしくお願いします」

……ん？ この場合よろしくって言っちゃったら自ら退路をふさぐことになっちゃう？

ぼくが座りながら自らの過ちに気づき、どうしようかと考えていると――

ズバッ！ と、勢いよく目の前の女の子が立ち上がった。

「二年A組、三千剣 さんぜんつるぎ 市 いち！ 役職は生徒会長、嫌いなものは世には

びこる悪だ！ 私は、この手に正義をのせて、悪を貫く！！」

ビシッと拳で天を衝く三千剣先輩。

頬も紅潮していて、その顔はどこか愉悦に歪んでいるように見えた。

「……………（ジロリ）」

三千剣先輩がポーズを崩して、ぼくの方を期待した目で見つめてくる。

い、いや……………そんな目をされても。

「え、えと……………かつこ……………いいですね」

とりあえず褒めてみた。

「えへへ、そうかなあ……………」

ワシワシと頭をかきながら席に座る三千剣先輩。

どうやら喜んでくれたらしい。

優しくて強くて綺麗な先輩は、変わった名前をしていて、それ以上に変わった性格の持ち主さんみたいだった。

三 正義の生徒会長（後書き）

市「好きな戦国大名は、浅井長政だ！」
圭太「……そうですか」

四 生徒会の作戦参報

ぼくと三千剣先輩の自己紹介が終わった。

そして必然的にぼくの視線は三千剣先輩の隣に座る女の子へ。

三千剣先輩も、その女の子のことをじっと見ている。
すると、

「……ん？ 私もやるのか？」

ずっと机の上に置かれている紙……アレは原稿用紙かな？ と、
にらめっこを続けていた女の子が顔を上げた。

瞬間思った感想——顔色が悪い。

なんか、病弱そうというか、不健康そうというか……目にクマとか
出来てるし。

制服の上から肩にのせるように羽織っている黒いボロ布みたいな
の（失礼だけど、他に表現が思いつかない）も輪をかけて不健康そ
うに見える。顔そのものは大人びた感じで美人なのに。

「当然。今ここに誕生した新たな生徒会役員を、共に迎え入れよう
じゃないか」

……やっぱし入ることになってる。ぼく一度も首を縦には振って
ないのに。

ガタリと音をたてて言われた女の子が立ち上がる。

「え……」

ぼくは思わず声を漏らしてしまう。

座っていた女の子はとっても身長が高かった。

ぼくは男の中でも小さい方だけど、それでも勿論同年代の女の子
の平均よりは高い。

それなのに三千剣先輩にもちよつと負けて、この人には大きく負

けている。この人、多分男子の平均よりも高い。

思わず羨望&驚きの混ざった視線を向けてしまっていたばくだつたが、立ち上がった女の子もじっとこつちを見ていることに気づく。あ、いきなりじろじろ見て失礼だったかな……。

そう思つて謝ろうとしたのだけど、

「へえ……お前が例の……」

「はい？」

向こうはぼくについて何らかの情報を得ているようで、好奇の視線を向けてくる。

少し不気味と言えば不気味かも知れないけど、怒らせちゃったわけじゃないみたいだから素直に喜んでおこう。

「えー……おほん。」

女の子はぼくから視線を外し、わざとらしく咳払いをしてから、

「二年、黒咲^{くろさき} 彩子^{あやこ}。役職は副会長、真面目に働いて純粋な奴が好きだ」

……なんだろう、ひょつとして釘を刺されてる？ 真面目に働けよっていう……。

「それと趣味はー……」

そんなことをぼくが考えている間にも、黒咲先輩の自己紹介は続く。……と思つていたら、

「なあ、お前好きなサイズは？」

「へ？」

いきなり意図のつかめない質問を黒咲先輩から投げかけられて、間抜けな返事をしてしまう。

あれ？ 自己紹介は？

「さ、サイズですか？ 一体なんの？」

ファーストフードでラージ派かスモール派かってこと？ いや、

そんなの聞くわけないか。何だろう……服とか？

「なんのって……女の胸のサイズに決まってるだろ。どれぐらいの大きさが好みなんだ？」

「ええ!？」

今時は初対面の男性に好きなバストのサイズを聞くのが当然なの!？

いや、いくら流行に疎いぼくでもそれはないと断言出来る。三千剣先輩にも聞かれなかったし……。

あたふたと回答に困るぼくだったが、それは次の黒咲先輩の言葉で更に極まることになった。

「揉んだんだろ？ 市の胸を。どうだった？」

「「なっ!？」」

ぼくと三千剣先輩が同時に驚いて声をあげる。

「あああ、彩子！ あれは偶然だったと言っただろう！」

「いんやゝ？ 市がそう思っただけで、この少年は狙ってやったのかも知れんぞ？」

「そ、そんなことするわけないじゃないですか！」

あと三千剣先輩、あの時のことを話すにしても、そんなところまで話さなくてもよかったでしょうに。

「そんなことするわけない……ふむ、市のおっぱいでは物足りんのか？」

「いや、物足りないとか……そんな……」

「市、どうやらお前の胸はお気にめさなかったそうだぞ」

黒咲先輩はニヤつきながら三千剣先輩にそんなことを報告する。

そしてそれを聞いて何故か三千剣先輩は悲しそうな顔をしてるし

！　なんで!？

「そ、そんなことないです！」

ぼくはたまらず声をあげる。

「ほう？　じゃあ、良い揉み心地だったと」

「いやそんなんじゃない……」

「じゃあ、不快だったのか」

うつゝ……。

「よ……——っただす!」

「うん？」

「良かったです！ 柔らかくて、大きさも丁度良いと思います!!」

……ぼくは、女の子たちの前で何を言っているのだろうか。
遅れて怒涛の恥ずかしさが押し寄せてくる。

三千剣先輩の顔も真っ赤だった……うう、ごめんなさいごめんなさい。セクハラ裁判とかはやめてください。百パーセントぼくが悪いかども……。

ぼくと三千剣先輩が顔を真っ赤にしてもじもじしていると、
「くく、あつはつはつはつは！」

黒咲先輩が大声で笑い出した。

「くくく、これが私の趣味——人をからかうことだ」

ニヤッと笑うその顔に、ぼくはようやく気づく。

——『真面目に働いて純粋な奴が好きだ』

純粋な奴ってのは……翻弄しやすい人ってことか……。

「あー、すまんすまん。いきなり盛大にからかって悪かったな。あんまりピュアなんでついついやりすぎてしまった。ごめん」

急に態度を変えて謝まれる。ついでに頭もなでなでされる。

副会長の黒咲彩子先輩は、悪い人じゃあないけれど、注意しなきゃいけない人だなと思った。

四 生徒会の作戦参報（後書き）

彩子「好きな戦国武将？ くく、松永久秀だ」

圭太「なんか、これ以上なくイメージ通りですけど、三千剣先輩には言えませんね、ソレ」

五 人畜無害、書記

「あのー、ところでぼくの役職ってなにになるんでしょうか？」

今更「やっぱりナシで」とは男的にも、草食的にも言いづらい。

「ふむ、君の役職か……考えていなかったな」

あっけらかんと三千剣先輩は言う。

「考えてもないのに勧誘したんですか……」

「市は馬鹿だからな」

「なっ！？ き、聞き捨てならんぞ彩子！」

異議を申し立てる三千剣先輩を無視して、黒咲先輩はぼくに尋ねてくる。

どうでもいいが、やっぱり何度見ても黒咲先輩は不健康そうだ。
寝不足なのかな？

「お前は、綺麗に字を書くのが得意か？……いや、字を書けるか？」

「あの、その二つ大分ニュアンスが違うと思うんですけど」

「いいから、答えろ」

「そ、そりゃあ字は書けますけど……」

「じゃ、お前書記な。決定」

「ええ？ そんな適当でいいんですか？」

一分と経ってない。

「いいよな？ 賢い市？」

「え？ 私賢い？ い、いやあ、どっちかって言ったら勉強は苦手な方なんだが、その……彩子に言われたら仕方ないなあ……。うん、私もそれで構わないと思う」

何が仕方ないのか全然わからないし、全然構わないことないと思うんだけど、どうやら決まったみたいだ。

そして三千剣先輩はとても純粋でピュアな少女であるらしい……
悪く言えば単純で乗せやすいというか……。

「書記……って、何をするんですか？　ぼく、今まで生徒会とか入ったことないんで全然わからないんですけど……」

「なに、簡単なことだ」

黒咲先輩は軽薄そうに笑って言う。

「まず各委員会からの報告書チェック、次に各クラブ長からの報告書チェック、行事の際のスピーチ内容考案、資材などの運搬、役員会議代表出席、市の相手、生徒会顧問の相手、私にからかわれる役……だいたいこれぐらいか？」

「多すぎません！？　他に何の仕事があるんですか？」

何かおかしなものも混ざってるし……！

「治安維持活動」

「あ……」

確かにそれはムリかも、良かった。やらなくていいんだ……って、違う違う！　騙されちゃ駄目だ。

「それ以外の仕事は全部ぼくの仕事なんですか？　先輩二人も手伝ってくれますよね！？」

「勿論だ！」

黒咲先輩が答える前に、三千剣先輩がぼくの手をハッシと掴んで言う。

「君——ええと、圭太くんだけに仕事を任せたりはしない。私も誠心誠意手伝わせてもらう」

異性に下の名で呼ばれるということに慣れていないぼくは、ちょっと恥ずかしかったりもしたけど、それ以上に——

「ありがとうございます！」

三千剣先輩の真っ直ぐな好意が嬉しかった。

そして先輩と二人ニコニコと笑う。

三千剣先輩の笑顔が眩しすぎて、ぼくはその時気がつかなかった。

奥で黒咲先輩が腹黒い笑みを浮かべてクツクツと喉を鳴らしていることに……。

五 人畜無害、書記（後書き）

圭太「字が書けるだけで書記って……」

彩子「人に与えられる役職なんて、今時そんなもんだ」

六 生徒会は回らない

「じゃーK坊、早速初仕事といっけてくれないか？」

……………。

「どうした？ K坊」

黒咲先輩がぼくの顔を心配そうに覗き込んでくる。

「……あの、突然脈絡もないあだ名をつけるのやめてくれませんか」「けー」の響きが気になるし、坊つてのも何かやだ。

「それじゃあ、お前のあだ名は今日からK坊。これならいいだろ。ちゃんと命名した」

「いや、そういう問題じゃなくて——」

不服なあだ名に、ぼくが抗議をしようと思ったら、

「K坊……可愛いな！」

……三千剣先輩が気に入ってしまったようだ。

「K坊……K坊……うん、K坊くん！」

キラキラとした目でこちらを見つめてくる。うつ……とてもじゃないけど無視出来ない……。

「は、はい？」

「呼んでみただけだ、K坊くん」

「はあ……」

あだ名は不服だが、三千剣先輩がとっても上機嫌で……なんだか仕草も可愛らしくてやっぱり反論出来ない。

あー……なんかこんな感じで、ずっと卒業まで先輩たちのペースに振り回されそう。

と、ぼくがプチセンチメンタルを体感していると、

「K坊、話聞いてたか？ 仕事だ仕事」

そう言って黒咲先輩はぼくの前にどっさりと言類の束を置く。

「ええ？ こんなにあるんですか？」

机の上に置かれたソレは、ぼくの目線の高さぐらいまである。

「市が手伝ってくれるそうだから、大丈夫だろ」

黒咲先輩はそう言くと、それキリ口を閉じて最初ぼくが入ってきた時と同じように原稿用紙と向かい合ってしまった。

ガタツと立ち上がった三千剣先輩が、ぼくの隣の椅子に移動してくる。

「一緒に頑張ろう。K坊くん」

「……は、はい！」

邪気のない可愛い笑顔にあたふたし始めるぼくの心を見透かされないよう、ぼくは書類にサツと手を伸ばす。

仕事に集中……。

どうやらこの書類の束は、新入生に向けての行事——クラブ紹介に関する書類のようだ。

パフォーマンスをするクラブの申請や、その内容が書かれた紙や、生徒会が新入生に向けて行うスピーチの下書き用紙なんかもある。

う、うゝん……こんなぼくにはとても務まらない……。

「あの、三千剣せんぱ——……何してるんですか？」

「へっ！？ い、いや……漢字が難しくてな、今辞書で……」

先輩はまるで古文書を読み解く学者のような表情で、電子辞書をおっかなびつくり叩いている。

「どれですか？」

ぼくは、先輩がシャーペンの先でコツコツ叩いている漢字を覗き見た。

——クラブ紹介に関する『諸注意』

「え」

……よく目にするんじゃないだろうか、生徒会に入ってるなら尚更。

「えと、先輩……ひょっとして、国語少し……いや大分苦手だった
りますか？」

三千剣先輩の肩がビクツと反応する。

「……先輩？」

「こ、ここ、国語はな、に、苦手なんだ。あ！も、勿論生徒会
長なんだから頭は良いんだぞ？でも、国語だけはダメで……ほ、
他はほぼ満点なんだが」

しどろもどろな三千剣先輩の弁明に、黒咲先輩が腹を抱えて笑っ
ている。

……。

「あ、あの……先輩はスピーチの下書きをお願いします……」

「えー？あ、いやその……わ、悪いな。他の教科は得意なんだが
……あ、あいきやんすまーと！」

ゲラゲラと笑い続ける黒咲先輩と、顔を真っ赤にする三千剣先輩
が、あまりに対照的だった。

六 生徒会は回らない（後書き）

彩子「ちなみに、I am smart で、普通に意味は通じるぞ」

市「ほうほう……なるほどな！ さすが彩子だ」

彩子「ま、まあな、当然だ」

圭太「……。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6539y/>

草食男子も肉を食う

2011年11月28日01時56分発行